

環境問題に対する意識の国際的差異についての所感

高山 茂 美

筆者が1951年に大学に入学して一般教養の地理学の講義で環境という言葉は初めて聞いた当時は、現今程環境問題という論議が行われるようになるとは夢想だにできなかった。人間が環境の所産であるとする環境決定論、Ratzel, F.のDeterminismにはそれなりの説得力があった。一方、人間は環境の影響を受けるが、それを能動的に変え得ると言う環境可能論にも一理あると納得した。学説の詳しい紹介をする必要もないが、Ratzel, F.の弟子で米国のClark大学の有名な地理学者、Semple, E. C. (1863-1912) 女史の「人間は環境の子である」という言葉が記憶の片隅にある。地理学でいう環境は単に自然環境だけでなく、人文・社会環境をも指している。現今の環境保護の考え方には人間社会を中心に据えた思想が見え隠れしている感がある。1970年代になって環境という言葉が頻出するようになり、環境問題の専門家と称する学者が急増してきたのには驚いた。環境科学自体が学際科学であるから元々なにをやっても良いはずだが、筆者の知己の農学者は農業問題はもう片づいたので環境問題をやるという。学問の生き残り策として格好の研究テーマだという。

日本の農業は確かに斜陽産業で、文部省も農学部の縮小・解体を意図している節がある。それにしても環境という用語をもっとも古くから使い、その影響や効果を論じてきた地理学は何という怠慢だったのかと不思議に思う。如何に優れた研究

成果を挙げても実践的課題に答えず、高踏的な抽象論から抜け出さなかったか、社会への還元を忘れていたからなのだろう。自然環境の一部を研究対象としている我々水文学徒にもその責任の一端がある。専門分化の傾向に拍車がかかり、それ所ではなかったし、環境問題と言うと、社会科学的要素が強いからと敬遠してきたのも事実である。一例として水質汚濁現象は人間活動の所産で飽くまで社会的現象であり、自然科学的現象ではない。にもかかわらず、汚濁の実状を客観的に表現するとすれば自然科学的方法が必要となり、社会科学では学問観の違いで正反対の結論が出かねない。公害問題と似てこの種の問題は学問的立場によって意見が分かれる。筆者はその手のテーマに対しては「生臭い」と称して避けてきた。関与の仕方によっては政治的としかたれないし、最も不得手なことだからである。この種の問題が起こったときに被害者側に不利な結論が出れば御用学者と非難され、有利な結論を得れば反体制側という色眼鏡で見られる。いずれにしても面白くない。以前に伝聞したことだが、依頼者側に不利な結論を書いて提出した所、その部分が削除されていた由で、公正中立な立場を貫くことの困難さを感じた。

環境情報研究所年報の第2号所載の庄司真理子氏、小野由美子氏の報告を読ませて頂き、1975年にドイツを初めて訪問した折りのことを想いだし

た。ベルリンの市街地の綺麗さに感心して歩いている内に気がついた。筆者の前を歩く老紳士がゴミを見つけると自分のポケットに蔵っている。これには驚いた。パリではエスカルゴと称する男子用公衆便所の廃水が道路脇を溢れて流れ、ローマのテルミニ近くの道ばたには乞食が屯して、排泄物が悪臭を放ち、ゴミが散らかり放題の状態を見た後だけにその好対照が強烈な印象をのこした。その後1980年代にはパリやローマも以前に比べて良くなった。パリではエスカルゴが潇洒な有料トイレに代わりつつあったし、テルミニ付近でゴミは散乱していても、悪臭はしなくなり、乞食は見かけなかった。新宿のホームレスと同様に一時的に退散していたのかも知れない。ベルリンは旧東ベルリン地区でややゴミが目立ち、物乞いにもあった。社会主義40年のつけを見る思いがした。旧西独から旧東独へ入ると道路面の舗装状態が悪いのですぐわかった。路端には路肩を表示するポールもなく、勿論反射灯はない。その代わりに道端の街路樹に白ペンキが塗ってある。街灯がないから集落の中はまだしも、郊外に出ると夜間は真っ暗で道路整備一つをとっても、東ドイツを背負い込んだ西ドイツに同情した。1996年にヨーロッパを歴訪した際に國によってゴミの処理や廃水の水質浄化の取り組み方にかなりの違いがあることに気がついた。国土が広くて余裕があるせいか、フランスではゴミの処理に対してかなり無神経な感じを受けた。少なくとも大都市では分別収集を行っている形跡は見えない。原子炉の廃棄物処理をこの國に依存しているわが國が批判できる立場にないことは確かであるが、ゴミ問題一つをとっても国際的関連が生じて来ているという実態に考えさせられた。パリのCharle de Gaulle空港を

建設する際に用地買収の相手は僅か3人の地主だったと聞かされてこの國の国土の広さを感じた。しかも殆ど農地で住宅はなかったらしい。立ち退きを迫る必要はなかったわけで、現在の空港周辺に見られるスラム的建物は空港完成後にジブシーが建てたとのことだった。土地利用に対する考え方に余裕を感じる。

数年前前からドイツでホテルに泊まると、以前には置いてあった固形の化粧石鹼がなくなって、代わりに石鹼液の入ったプラスチック容器が置いてあり、水質浄化に協力して欲しい旨の断り書きを見かけるようになった。スイスでも同じような設備があり、備え付けのタオルにしても必要以上に洗濯しないで済むように宿泊客に協力を求めている。連泊する場合などこれまでは未使用のものまで交換するのがサービスと心得ている傾向が見られたが、最近はわざわざ洗って欲しいタオル類だけを床に放置して下さいという要請文をしばしば見かけた。洗濯物の量が減れば、その分だけ洗剤の使用量も減るから水質の汚濁負荷を軽減することになる。この種の試みが汚濁総量の軽減にどれほどの効果があるのか不明だが、産業廃水だけが水質汚濁の原因ではなく、家庭からの廃水が時として最大の汚濁要因となっている現実に注意が向けられたことは進歩と言える。従来の公害論争は往々にして産業廃水や産業廃棄物のみを元凶としてきたが、家庭下水も同罪であることを認識した点で一般家庭の注意と関心を喚起し、洗剤使用の節約や、し尿処理への関心が高まったのは好ましい傾向である。

ヨーロッパのように国際河川の上流部と下流部とで河川の水質を巡って紛争を生じると言った厄介さはないが、わが國でも上流部からの廃水で下

環境問題に対する意識の国際的差異についての所感

流部の水質汚濁が起こり、魚の大量へい死が報じられたりする。上・下流部での利害対立はこれまでもあったが、水質の汚濁がどのくらい進行すると許容できないのかといった点の客観的基準がない。最重要なのは飲料水としての水質が保持されているかどうかの点であろう。ドイツの工業地帯からの廃水でライン川への鮭の遡上が減り、自国内漁業に打撃を与えたが、水道水源をライン川に依存するオランダとの間で水質汚濁論議が激化したのは飲料水の水質が悪化したのが契機だった。国際問題となり、結局は金銭補償でひとまず決着し、以後水質の保持に努力する約束が交わされた。

日本では琵琶湖の水質浄化運動が市民レベルで最初の大規模なものであろう。京都、大阪を抱えた琵琶湖の水道水源としての水質悪化は500万人以上に関わる社会問題として放置できないが、上流側流域の住民の努力も永久的に続けなければ意味がない。

原始社会においては水質を悪化させる程人間活動も活発でなかった。人口増大とともにそれらの人々を養うために農業や牧畜が始まり、自然破壊が始まった。元来、人間は自然の環境を破壊することによって現在の人口を維持しえたと言えるので、もし地球環境の破壊を全く許さないと言うのであれば、現在の人口を原始時代の約百万人程度に減らすしかない。数十億人の人間をそこまで減らすのは核戦争でも起こらない限り無理であろう。環境保全論には得てしてこの種の総論賛成各論反対の傾向がある。昨今の沖縄の海上基地問題と同様に沖縄に作るのは反対だが、自宅の近くには困るという。ゴミ処理問題の先行きにも安閑としていられないが、さりとて名案がない。地域エ

ゴむき出しの対立が今後は益々ふえると思われる。南極では自分の排泄物も持ち帰る努力をしていると聞いた。観光地化した高山地域でもこれと同じ話を聞いたことがある。Matterhorn山麓のZermattという町はガソリン自動車の進入を原則的に禁止し、電気自動車と馬車が観光客を運んでいる。この町で筆者は三十年ぶりに馬糞の臭いを嗅いだ。

一般の自動車は鉄道で一つ手前の駅前にある広大な駐車場に留めて置かねばならない。筆者のように車を運転しない者にとっては余り実感がないが、車に乗り付けている方々には不便であろう。しかし、町の大気環境を保全するためにとられたこの処置にたいして不満は出てないという。連邦制をとるスイスではCantonカントンという州に相当する行政体の権限が強く、独自の立法権をもっている。右へ習えのわが国との基本的差異を感じる。スイスやドイツなどの廃水処理に対する努力の結果、ライン川下流部での水質は以前に比べて改善されたいが、水質汚濁の進行は目に見えて急速でも、水質の改善は遅々として進まない。わが国でも隅田川の水質汚濁が悪臭を放つに至って問題となり、その後の水質浄化作業によってかなり改善された。河川自体は少々の汚れであれば、希釈、酸化、凝集、沈降、生物分解、吸着、気化などの様々な自浄作用によって人口的な処理を加えなくても水質の汚濁を防止する。この自浄能力を超えた汚濁負荷が川に流入した場合には水質は悪化の方向へ進む。昔は「三尺下がれば水清し」と言われていた。東京周辺ではし尿が近郊農家に肥料として還元されていたために都市河川でありながら、多摩川など清流と呼ばれていた。皮肉なことに近郊農地の宅地化が進み都市化の進行

が水質汚濁を早めた。確かに現在でこそスイスは裕福な国であるが、近世までは山地が多く、これといった産業もなかったのも若い壮丁は傭兵として外国に出稼ぎに行く始末だった。フランス革命の折りに宮殿の衛兵として最後まで革命軍と猛烈な戦闘を展開したのがスイスの傭兵であったことは意外に知られていない。SoldatがSoldierの語源で元来はスイス人の傭兵が勇敢かつ、忠実であったことから来ている。山岳地域の比較的経済的に恵まれない地域にとっては観光産業が重要なことは言うまでもない。しかし観光客の増大は絶えず環境に悪影響を及ぼし続けてきた。スキー・リフトや駐車場等の設備は山地の生態系を破壊し、しばしば現地の住民の利害と対立してきた。観光産業という国の経済に重要な寄与をしている産業と環境保全とをいかに調和させるのかスイスほど真剣に考えている国は少ないように思う。1979年に連邦政府はこの問題における明確な基準を公表した。そこでは種々な型の観光地の合理的発展が説かれる一方で、各地の地域性、生態系上の特性を考慮すべきことが明示されている。日本では長野オリンピックに際してスキー場の拡張が開発派と環境保全派との対立を生み出した。観光地としては客の誘致に熱心にならざるを得まいが、雪カノン砲による人口雪の製造は周囲の環境に被害をもたらし、動物や植物の中にはその習性を壊されて絶滅の危機にあるという。この事実は人間生活にとって余り影響がないもののように誤解されているが、永年月の後に後世代に人間存在そのものを危うくする点を強調したい。地球環境問題は人類が地球という大きな自然環境の枠をはみ出しかけて発生した問題である。そこには自然科学だけでなく、社会科学的考察をとり入れなければ解決で

きないことが多い。昔読んだ米国の雑誌に皮肉な漫画が載っていた。自然保護という題で陸上には人間の骨が散らばり、海には魚が元気に泳いでいると言った絵である。環境問題を突き詰めて考えればそうならざるを得まい。どのようにして調和を取っていくのか難しい問題だと思う。

環境破壊の現状を認識することで研究の目的を達成したと考え、後は行政サイドでよろしくとは行かなくなっている。自然科学者と社会科学者との協力が益々必要になる。

参考文献

- 庄司真理子 (1994) ヨーロッパ有数の環境都市フライブルグ。環境情報研究 2号 111-124頁
- 小野由美子 (1994) 千葉県的一般廃棄物・域外処理の全容とゴミ問題に対する一取り組み
環境情報研究 2号 125-138頁